2024年度 第6期 311ゼミナール
学校避難班活動報告書

メンバー

佐々木侑里(M2年) 石川あいり(4年) 綾部愛美(4年) 伊藤紬(4年)

二階堂颯映(4年) 村上真綺(4年) 采澤七海(4年) 本間陽菜(3年) 菊地愛香(2年)

上野愛莉(2年) 小原梨紗(2年) 田村楓菜(1年) 吉谷洋香(1年) 遊佐将伍(1年)

目次

○目的・・・p.3
○今年度の活動について・・・p.3
○木町通小授業実践「防災小説」調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.3

①教材作成
木町通小概要・・p.3
防災小説について・・・p.3
先生方との打ち合わせから分かったこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.4
活動計画とねらい・・・p.4
各時間の指導上での工夫点・・・p.5
【資料】指導案・ワークシート・・・p.5

②実践
授業における児童の様子・・・p.7
書いてもらった小説(取り上げたもの)・・p.8
書いてもらった小説(取り上げたもの以外)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.10
児童が書いた感想について・・p.11
気づいたこと・・p.12
良かった・効果的だった点・・p.12

③総括
課題と提案・・・p.12
防災小説の有効性・・・p.12

○来年度に向けて・・・p.13
○学生の感想・・p.13

○目的

311ゼミナール学校避難班は、避難訓練を考えることを目的として活動を行っている。昨年度までは、避難訓練の視察・検討を行い避難訓練の在り方について考えを深めた。今年度は、教室外での避難に関わる防災教育を通して、児童が主体的に考えて行動できるような訓練を検討する。本実践は、防災小説を用いて児童が避難する際の多角的な視点を育み、訓練を自分事として捉えることができるようになることを目的とする。

○今年度の活動について

今年度の学校避難訓練班は、仙台市立木町通小学校を訪問し、小学5年生に避難訓練についての授業を1日がかりで行った。前年度の聖ウルスラ学院栄智小学校の学童「光クラブ」での避難訓練活動にて、ゼミ側がもう少し避難訓練をプロデュースできたのではないかという反省が出たため、より密に避難訓練に携われる企画を考えた。

今回は、仙台市立木町通小学校の地域連携コーディネーター「木の芽ねっと」の植村みちるさんから、311ゼミナールの担当の武田真一先生に連絡があり、防災授業を委託したいという要請をいただいた。311ゼミとして、避難訓練部ループと避難所運営グループが対応できると整理し、協議を重ねた結果、1日5校時分を使って5年生を対象に授業をすることになった。

○木町通小授業実践「防災小説」調査概要

①教材作成

【木町通小概要】

仙台市地下鉄南北線北四番丁駅から徒歩6分の位置にある小学校。児童数は1年生から6年生まで合わせて518人（2023年度時点）。

木町通小学校は過去に避難所運営訓練（2016）や学校地域合同防災訓練（2023）などを行っている。

（980-0801 仙台市青葉区木町通一丁目7-36）

【防災小説について】

木町通小学校で防災授業を行うに当たって、活動で使用する教材についてメンバーで話し合いを行った。案としては、学校探検やクロスロード、図上避難訓練など多くの意見が挙がった。

ここで、対象が5年生ということもあり、地域の防災についても知識が豊富で、避難訓練にはある程度自信があると仮定した。そこで、正しい避難の仕方を確認し、その道をたどりながら「この避難は本当に安全なのか？」という気付きや、避難訓練をする上での課題などについて考えたいと思い、今年度は防災小説を選択した。

本実践で扱う防災小説とは、近未来の特定の日時に起こる巨大地震を想定して自分を主人公に物語を綴ることで、災害を自分事として捉えることを目指した教材である。教材の一番の特徴は、指定した近未来に起こる巨大地震を、実際に起きたものとして描くことである。地震が発生したその時自分は何をしているか、家族はどこで何をしているか、自分はどんな気持ちになるか、町の様子はどうか、などを想像する。その想像は書き手によって異なるため、書き終えた後の読み合いを通して児童が別の児童の考えに触れ、新たな気づきを得ることができると考えられる。

防災小説は、日時が指定されること、巨大地震が発生すること以外は特に大き

な指定がないため、とても自由度の高い教材である。しかし、唯一のルールとして「物語は希望をもって終えること」というものがある。つまり、「様々な困難があったが無事家族と会うことができた」などとハッピーエンドで終わらせるように小説を綴り、実際に巨大地震が起こり避難する時どのような困難が起こりうるのか、児童の想像力をはたらかせる。

今回は実践当日の11月15日の15時ごろに震度6強の大地震が起きた設定とした。児童の帰宅時間に合わせるため、時間帯を15時ごろにした。放課後の時間帯のため、家に帰る児童、友達と公園で遊ぶ児童などそれぞれの過ごし方があると予想できる。地震が起きたときに①どこにいるのか ②誰といるのか ③周りはどうなっているのか ④どういう風に感じるのか ⑤どのように身を守るのか ⑥どこに避難するのかという観点から学校でも家でもない、教員や保護者もいない状況でどのように行動をとるか児童に考えさせる。

防災小説を書くことで、児童が避難行動の大切さに気付き、学校での避難訓練に意欲的に参加することを期待し、今年度は活動の題材として選択した。

【先生方との打ち合わせで分かったこと】

木町通小学校とは、今回の活動の対象である5年生の担当教員らとコーディネーターとの打ち合わせを3度実施した。以下が打ち合わせで行った内容，決まったことである。

1度目（7月10日）

児童の防災に関する認識や、これまで実施してきた避難訓練や活動についての共有や、今後の活動の展開を大まかに相談。

2度目（10月24日）

作成した活動計画案について実施可能かすり合わせを実施。その計画案に基づく様々な調整や確認，依頼を行う。（中継の可否，クラス分け，準備物の確認等）

3度目（11月13日）

中継について実際に外に出て問題ないかを確認。前回の打ち合わせで確認できなかった準備物の確認，ワークシートの印刷を依頼。当日の服装など詳細について確認。

【活動計画とねらい】

時間	活動内容	ねらい
1	・防災小説の概要説明、ルール確認。 ・ワークシートの記入。	・防災小説について知り、活動内容を　理解することができる。 ・ワークシートを用いて、災害が起き　た時の状況を具体的に想像すること　ができる。
2	・小説を書く。	・ワークシートを用いて、災害が起き　た時の状況を具体的に想像すること　ができる。 ・防災小説のルールを守って、ワークシートを基に400字程度の作文を書く　ことができる。
3	・グループごとに作文を読み合う。 ・付箋に作文の感想を書かせ、児童の　作文に貼る。 ・グループ内で他の児童にお勧めした　い作文を1つ選ぶ。	・他の児童の防災小説を読み、良い点、改善すべき点を見つけることが　できる。
4	・実際に校外に出る。 ・校外に出ない児童は教室内で中継を　見る。 ・避難訓練は何のために行っているの　か考える。 ・1～4時間目の感想を書く。	・代表児童による中継から、実際の避難を想定してより具体的に考えることができる。 ・訓練や備えの大切さに気付くことができる。

【各時間の指導上での工夫点】

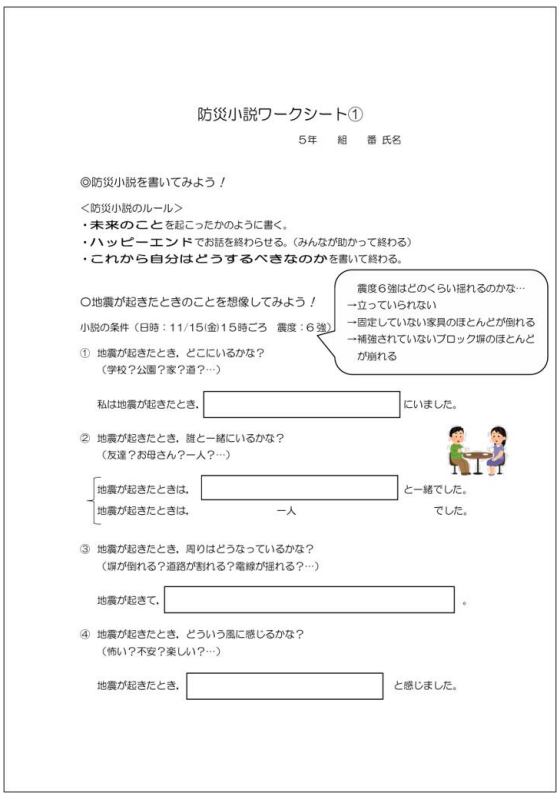
1時間目は、突然活動に入らず、アイスブレイクから開始する。防災小説について説明する際には、防災小説の良くない例を紹介する。この工夫により、ルールについて理解を深められるようにする。また、ワークシートを用いることで、具体的に想像できるようにする。 2時間目は、机間指導を充実させ、早く終わった児童には小説をよりよくする声掛け、手が止まっている児童には小説の内容を一緒に考える援助を行う。児童の個人差に合わせた指導を複数人の学生で行い、その様子は学生間で適宜共有する。

3時間目は、防災小説を読み合う時間である。児童が書く、付箋の感想が端的にならないように、グループに入る学生が補助する。代表児童を決める時に、決める方法でみんなが傷つかないものを提案する。

4時間目は、代表生徒の防災小説に合わせて中継を行う時間である。書いて終わりではなく、実際の場所に移動することで、防災小説の課題に気付かせる。みんなでミッションに取り組むことで、自分が気付かなかった様々な意見があることに気付く。中継を経て、防災小説をより良いものに変えられるよう、教室に残った学生と中継に行く学生とが連携し、教室に残った児童が他人事にならない工夫をする。

【資料】ワークシート・スライド

ワークシート①



防災小説ワークシート①

5年　　組　　番 氏名

◎防災小説を書いてみよう！

＜防災小説のルール＞

・**未来のこと**を起こったかのように書く。

・**ハッピーエンド**でお話を終わらせる。（みんなが助かって終わる）

・**これから自分はどうするべきなのか**を書いて終わる。

○地震が起きたときのことを想像してみよう！

小説の条件（日時：11/15(金)15時ごろ　震度：6強）

震度6強はどのくらい揺れるのかな…
→立っていられない
→固定していない家具のほとんどが倒れる
→補強されていないブロック塀のほとんどが崩れる

① 地震が起きたとき，どこにいるかな？
（学校？公園？家？道？…）

私は地震が起きたとき，［　　］にいました。

② 地震が起きたとき，誰と一緒にいるかな？
（友達？お母さん？一人？…）

地震が起きたときは，［　　］と一緒でした。
地震が起きたときは，　　一人　　でした。

③ 地震が起きたとき，周りはどうなっているかな？
（塀が倒れる？道路が割れる？電線が揺れる？…）

地震が起きて，［　　］。

④ 地震が起きたとき，どういう風に感じるかな？
（怖い？不安？楽しい？…）

地震が起きたとき，［　　］と感じました。

⑤ 地震が起きたとき，どんな身を守る行動をとるかな？
（机の下に隠れる？窓を開ける？…）

地震が起きたとき，身を守るために［　　］をしました。

⑥ 地震が収まったら，どこを通って，どこに避難するかな？
（病院通？家の近くの道？…／公園？学校？…）

地震が収まったら，［　　］を通って，
［　　］に避難しました。

M E M O

・診断すると次に何を行っていく？

・避難先はどんな状況かな？

ワークシート②

防災小説ワークシート②

5年　組　番　氏名

★先生に言われたミッションについて考えよう。

ミッション①「　　」

ミッション②「　　」

ミッション③「　　」

ミッション④「　　」

～メモ～（気づいたことがあれば書いておこう）

★学校の周りの地図(書き込み OK です)

★感想を書こう。（書くヒント　学んだこと・気づいたこと・これから気をつけたいと思ったこと）

スライド（抜粋）

☆防災小説の3つの心得☆

☑**未来のこと**を起こったかのように書くべし！

☑**ハッピーエンド**でお話を終わらせるべし！

☑**これから自分はどうするべきなのか**を書いて終わるべし！

この3つのポイントを入れられたら君も防災マスター！！

このポイントを入れてみよう！

☆**どこ**にいる？
☆**誰**といるの？
☆**周り**はどうなっているの？
☆どのように**身を守る**？
☆**避難先**はどこ？
☆避難先は**どんな状況**かな？

本当にそこは安全かな？？

火事、事故があるかもしれないね。

遊具や木が倒れてくるかもしれないよ！

お家の人が心配しているかも…

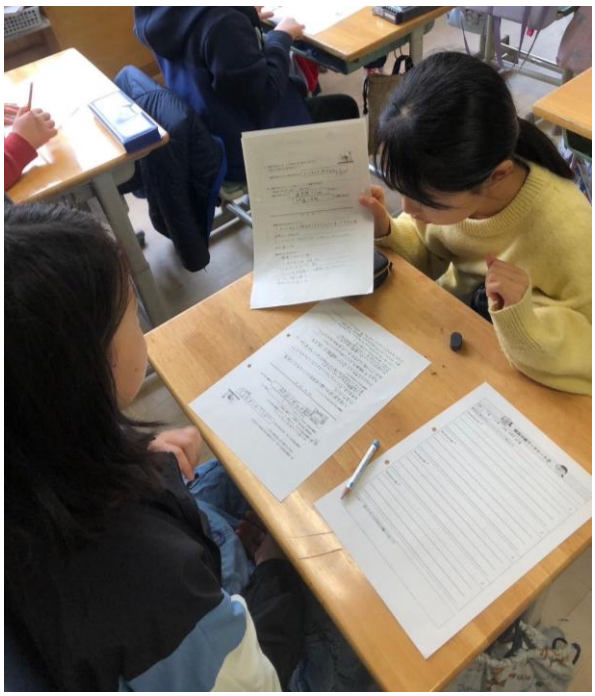
命を守れる防災小説にしよう！

②実践

【授業における児童の様子】

児童は、1時間目から4時間目まで防災小説に取り組んだ。

1時間目は、「防災小説の概要説明」「小説を書く際のルールの確認」「ワークシートの記入」を行なった。防災小説についての説明を始めると、「すでに知っている」と答える児童が半数程度いた。実際に、私たちが作成した防災小説を聞いてもらい、ワークシートの記入に入ったため、見通しが持てた児童はスムーズにワークシートの記入を行うことができていた。



ワークシートに記入する前は、起こっていないことを起こったように書くことに難しさを感じている児童もいたが、ワークシートの記入の時間には、私たちが提示した通り、書き進めることができていた。手が止まったときに周りの友達に意見を求める児童や、私たち大学生に質問をする児童が多くみられ、意欲的に取り組んでいるように感じられた。

2時間目は、「防災小説を書く活動」を行なった。タイトルや名前をどこに書くかの指示を私たちが行うことができていなかったため、原稿用紙の書き方に不安を感じる児童が何名かいたものの、小説の内容に関しては、小説を書く際のルールで説明した通り、書き始めることができていた。

「災害が起きたときの状況を具体的に想像して書く」というねらいを持って授業を行っていたため、ワークシートに記入をさせ、頭の中にある考えを言葉にすることができるようにした。その効果もあり、小説をすぐに書き始めることができる児童が多く、書き出しで手が止まる児童はいなかった。小説を書く時間であることを説明した際、拍手をしている児童、笑顔になっている児童がいたことが印象に残っている。

児童が防災小説に意欲的に、そして、興味を持って取り組むことができたのは、1時間目からの流れが良かったからではないかと考える。実際に

「事前にワークシートを使って小説を書く準備をしていたから書きやすかった」と伝えてくれた児童もいた。1時間目同様、手が止まったときに周りの友達に意見を求める児童や意見交換をする児童、私たち大学生に質問をする児童が多くみられた。

3時間目は、「グループごとに小説を読み合う活動」「グループ内で他の児童にお勧めしたい小説を1つ選ぶ活動」を行なった。グループごとに小説を読み合い、付箋に感想を書くという活動から行った。グループに大学生が1人ずつ入り、スムーズな進行を促した。大学生と防災について語り合う姿や自分の思いを伝える児童の姿をみることができた。

読み合い、感想を書いた後は、グループ内で他の人にお勧めしたい小説を1つ選ぶ活動を行った。スムーズに決まるグループもあれば、選ばれたい児童が多数おり、なかなか決まらないグループもあった。「発表したい」「選ばれたい」「中継に行きたい」という声が多方面から聞こえてくる、とても活発な時間であった。グループから1人ずつ発表を行った際、「ダンゴムシのポーズ」という言葉が出てきた場面があった。その際、児童は一斉にポーズを取っていた。また、発表が終わるたびに大きい拍手が起こるなど、大変充実した有意義な時間であった。

4時間目は、「実際に校外に出て中継」「避難訓練は何のために行っているのか考える活動」「振り返り」を行った。

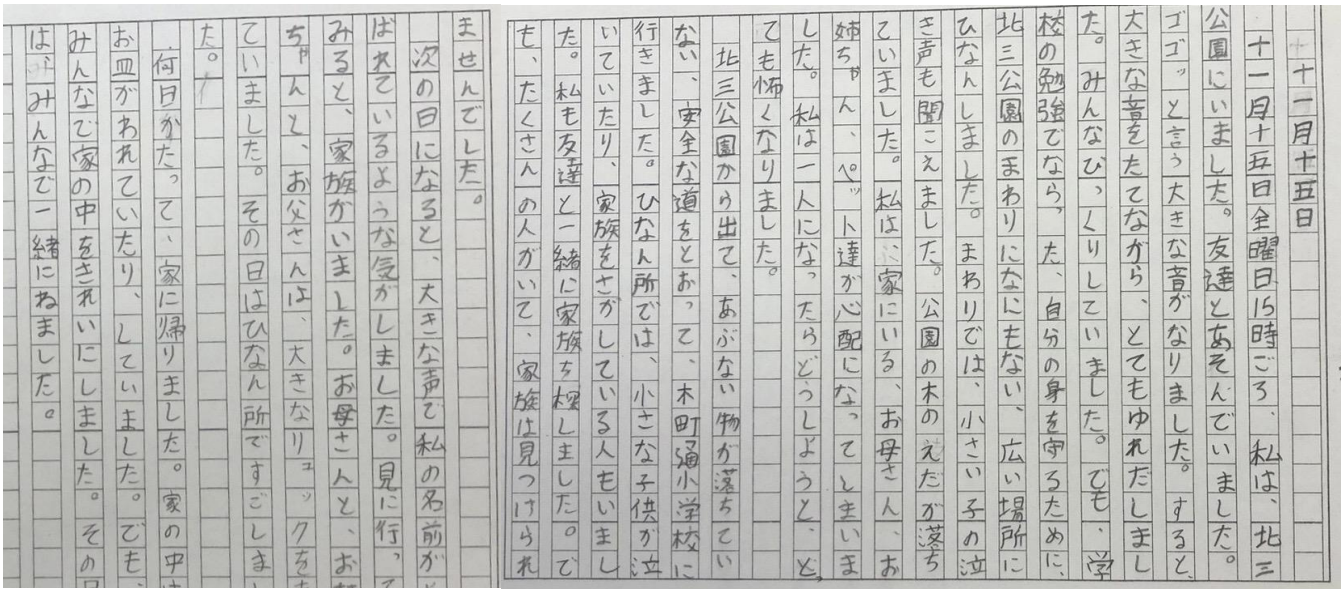
途中で中継が切れてしまったり、集中力が切れてしまった児童がいたりと様々な問題もあったが、最終的には、中継に行った児童も、教室で学んでいた児童もどちらも学びの深まる時間だったのではないかと思う。

実際に校外に出て、あたりを見渡しながら、身の回りの危険と向き合ったため、想像で考えるよりもイメージが膨らみやすかったように思う。防災小説の活動と結び付けて、危険な場所を実際に確認することができていた。危険な場所をそれぞれつぶやく児童の姿が印象に残っている。

振り返りでは、児童に感想を書いてもらった。楽しかったという感想だけではなく、新たな発見があったという感想やこれからの抱負を述べる感想が数多く見られたため、防災小説の活動は成功だったように思う。授業の最後に木町通小学校の先生が、東日本大震災の本を持ってきて、児童に見せていた。写真とともに事実を伝える先生の話を児童は真剣に聞いていた。実際にあったことから目を背けず、伝えることは大事であると改めて感じる時間であった。

児童は終始、真剣なまなざしで活動に取り組んでいた。感想からも、防災小説を書いたことで学びが深まった児童が多かったように感じる。

【中継でとりあげた小説（取り上げたもの）】
★児童A



十一月十五日

十一月十五日金曜日15時ごろ、私は、北三公園にいました。友達とあそんでいました。ゴゴッと言う大きな音がなりました。すると、大きな音をたてながら、とてもゆれだしました。みんなびっくりしていました。でも、学校の勉強でならった、自分の身を守るために、北三公園のまわりになにもない、広い場所にひなんしました。まわりでは、小さい子の泣き声も聞こえました。公園の木のえだが落ちていました。私は家にいる、お母さん、お姉ちゃん、ペット達が心配になってしまいました。私は一人になったらどうしようと、とても怖くなりました。

北三公園から出て、あぶない物が落ちていない、安全な道をとおって、木町通小学校に行きました。ひなん所では、小さな子供が泣いていたり、家族をさがしている人もいました。私も友達と一緒に家族を探しました。でも、たくさんの人がいて、家族は見つけられませんでした。

次の日になると、大きな声で私の名前がよばれているような気がしました。見に行ってみると、家族がいました。お母さんと、おねちゃんと、お父さんは、大きなリュックをもっていました。その日はひなん所ですごしました。

何日かたって、家に帰りました。家の中はお皿があれていたり、していました。でも、みんなで家の中をきれいにしました。その日はみんなで一緒にねました。

児童Aは、小学校の近くにある北三番町公園（北三公園）で友達と遊んでいる時に地震が起きたとし、防災小説を書いた。

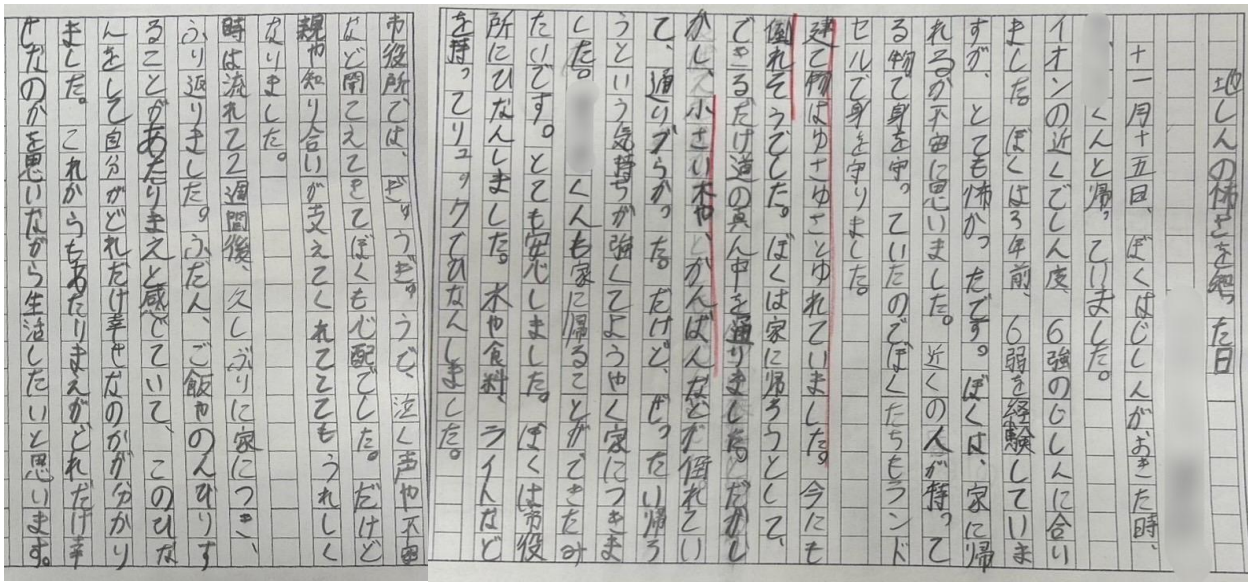
地震が起き、驚いたが、学校で教わった身の守り方を思い出し、公園内の広い場所へと移動をした。その後、北三番町公園を出て、安全な道を通り、避難所である木町通小学校に向かった。避難所には沢山の人がいたため、自分の家族を簡単に見つけることはできなかった。

しかし、最終的には家族と会うことができ、一緒に家に帰り、部屋を片付け、眠るというハッピーエンドで終わっている。

授業内で行った中継では、木町通小学校を出て、左図のようなルールを通って、★で示した北三番丁公園へ向かった。

児童Aは、実際に公園に足を運び、防災小説に書いた通り、公園で遊び、地震が起きた時の行動を取り、木町通小学校に戻ってきた。

★児童B



地しんの体験をした日

十一月十五日、ぼくはじしんがおきた時、
くんと帰っていました。
イオンの近くでじん度、6強のじしんに合いました。ぼくは3年前、6弱を経験していますが、とても怖かったです。ぼくは、家に帰れるか不安に思いました。近くの人が持っている物で身を守っていたのでぼくたちもランドセルで身を守りました。
建て物はゆさゆさとゆれていました。今にも倒れそうでした。ぼくは家に帰ろうとして、でこぼこだけ道の真ん中を通りました。だかしかし、小さい木やかんばんなどが倒れていて、通りづらかった。だけど、だったら帰ろうという気持ちが強くてようやく家につきました。
くんも家に帰ることができたみたいです。とても安心しました。ぼくは市役所にひなんしました。水や食料、ライトなどを持ってリュックでひなんしました。
市役所では、どすうどすうと、泣く声や不安などが聞こえてきてぼくも心配でした。だけど親や知り合いが支えてくれてとてもうれしくなりました。
時は流れて2週間後、久しぶりに家につき、ふり返りました。ふだん、ご飯やのんびりすることがあたりまえと感じていて、このひなんをして自分がどれだけ幸せなのかが分かりました。これからもあたりまえがどれだけ幸せなのかを思いながら生活したいと思います。

児童Bは下校時にイオン仙台晩翠通店の近くを通った際、地震が起きたと想定して、防災小説を書いた。

家に帰ることができるのかと不安に思いながら、児童Bと友達はランドセルで身を守った。建物や看板、木が揺れたり、倒れたりしていた。2人は家に帰ることができた。

その後、児童Bは水や食料、ライトなどを持って市役所に避難をした。市役所には沢山の人がいたが、親戚や知り合いと会うことができた。2週間後、家で生活をすることができ、当たり前の幸せに気付くことができたというハッピーエンドで終わっている。

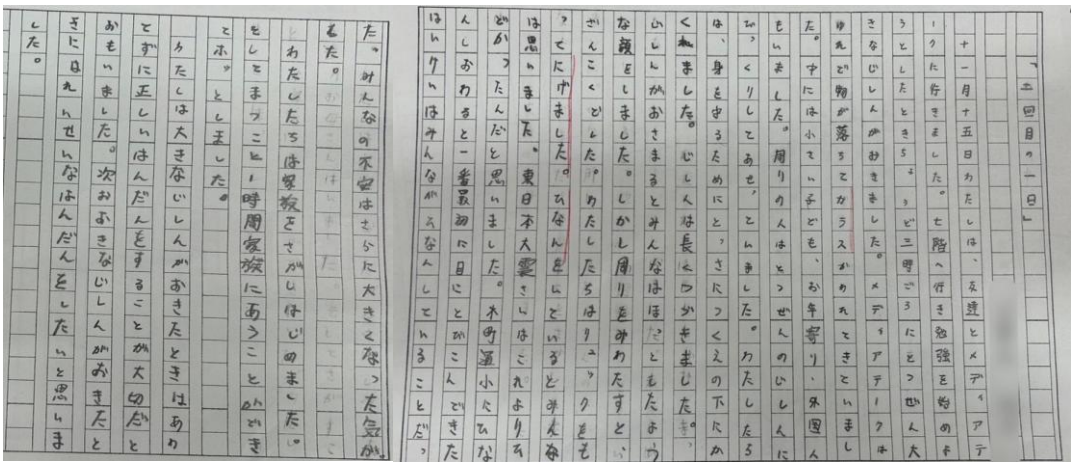
授業内で行った中継では、木町通小学校を出て、左図のようなルールを通って、★で示したイオン仙台晩翠通店へ向かった。

児童Bは小説に書いた友達とともに、実際にイオン仙台晩翠通店付近まで足を運び、木町通小学校に戻ってきた。

【書いてもらった小説（取り上げたもの以外）】

中継を行うために、取り上げた小説以外にも素敵な小説が数多くあった。

★様々な場所で災害が発生したことを想定する児童



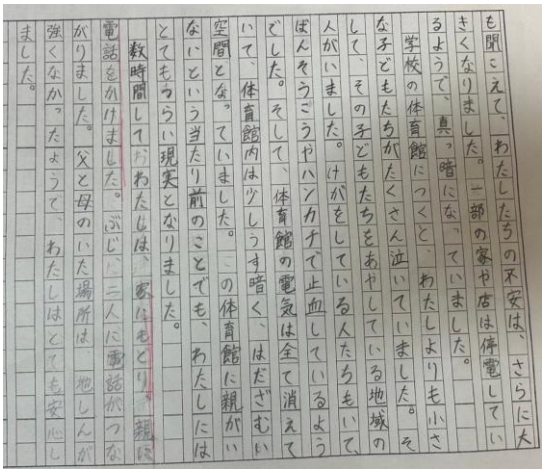
上のようにメディアテークにいることを想定し書いた児童がいた。そのほかにも、学校の理科室や図書館にいた児童、家に着いていた児童、教室や家などに1人でいた児童、習い事をしていた児童、公園で遊んでいた児童、児童館にいた児童、定禅寺通りを歩いていた児童、バスに乗っていた児童、イオンで買い物をしていた児童など様々な想定をする児童がいた。地震が発生した15時頃に何をしているかを想像し、自分の生活に落とし込んで考えることができていたからこそ、このような結果になったと考える。

どの場所であっても、児童は身を守るための行動、自分がすべき行動をすることができていた。安全な道を探し移動をしたり、近くにあるお店の枕で頭を守ったり、ダンゴムシのポーズをして身を守ったりするなど、児童は自分なりに考え、自分の身を自分で守っていた。

そして、一時的に身の安全を確保した後は、避難所である木町通小学校に避難をするという流れで書く児童が多かったが、安全であると判断し、大学病院に避難をした児童、場所によってはその場で待機を選ぶ児童もいた。命を守るための行動を冷静に考えることができていたように思う。

また、避難行動を行うときの動きとして、児童の作文から数多く見られた言葉は「防災リュック」である。多くの児童は、防災リュックの存在を知り、災害時に有効な物であることを理解していた。東日本大震災を経験していない世代の児童から「防災リュック」という言葉が出てきたことに感銘を受けるとともに、防災意識の高さに感心した。

★起きると予想される出来事を具体的に想定する児童



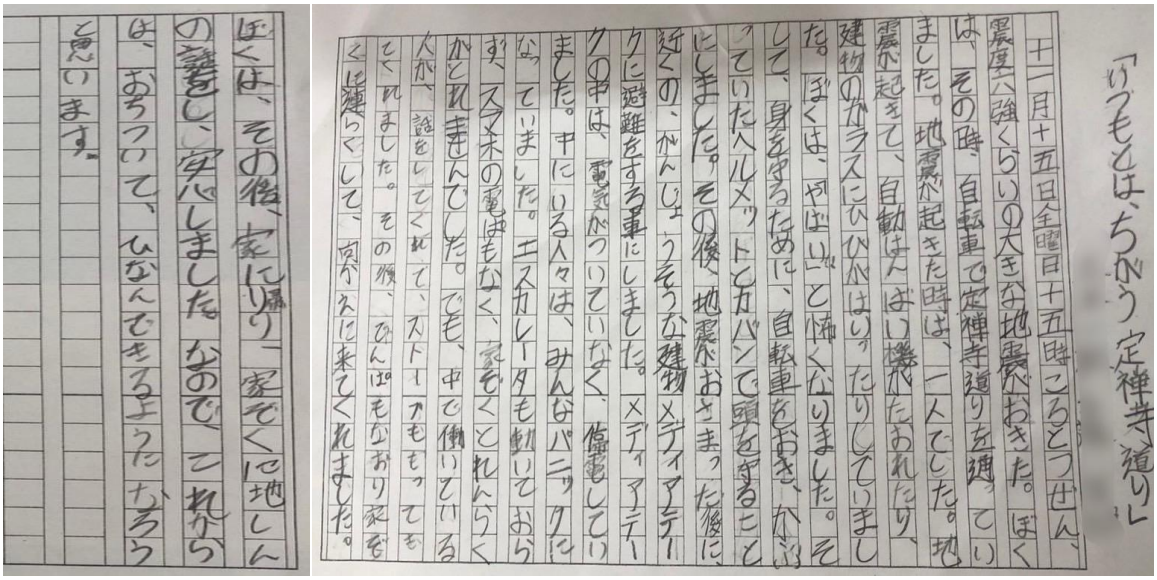
「はじめての体験」

十一月十五日の十五時ごろ、わたしは、いつもの待ち合わせ場所である西公園の入り口で友達二人といっしょに、学校の出来事などを話しあっていました。すると、何の前ぶれもなく、立っていられないほどの大きなゆれにおそわれました。わたしは、とっさにむしゃっていたリュックで頭をかくしました。うでの間からは、地面にひびが入ったり、木が大きくゆれて、かれ葉などがたくさん落ちるといういつもとまったくちがう光景が目に入りました。わたしと友達は親などのことが心配になり、とてもこわくなりました。

地しんのゆれがおさまって、周りを見わたすと、もんごうきやでんちゅうがたおれていました。わたしは、友達といっしょに学校へひなんすることにしました。ひなんする人たちがわたしたちと同じようにひなんする人たちがあわててひなんしていました。サイレンの音も聞こえて、わたしたちの不安は、さらに大きくなりました。一部の家や店は停電しているようで、真っ暗になっていました。

学校の体育館につくと、わたしよりも小さな子どもたちがたくさん泣いていました。そして、その子どもたちをあやしている地域の人がいました。けがをしている人たちもいて、ばんそうこうやハンカチで止血しているようでした。そして、体育館の電気は全て消えていて、体育館内は少しうす暗く、はだざむい空間となっていました。この体育館に親がいないという当たり前のことでも、わたしにはとてもつらい現実となりました。

数時間しておわたしは、家にもどり、親に電話をかけました。ぶじに二人に電話がつながりました。父と母のいた場所は、地しんが強くなかったようで、わたしはとても安心しました。



「いつもとはちがう定禅寺通り」

十二月十五日土曜日十五時ごろとつぜん、震度六強くらいの大きな地震がおきた。ぼくは、その時、自転車で定禅寺通りを通っていました。地震が起きた時は、一人でした。地震が起きて、自動はんばい機がたおれたり、建物のガラスにひびがはいったりしていました。ぼくは、やばい！と怖くなりました。そして、身をまもるために、自転車をおき、かばんでヘルメットとカバンで頭をかくすことにしました。その後、地震がおさまった後に、近くの、かんじょうそうな建物メディアテークに避難をする事にしました。メディアテークの中は、電気がついていなく、停電していました。中にいる人々は、みんなパニックになっていました。エスカレータも動いておらず、スマホの電波もなく、家もくこれないらくかとれませんでした。でも、中で働いている人が、話をしてくれて、ストーブももってきてくれました。その後、なんぱもなおり家をくに帰らくして、夜がえに来てくれました。

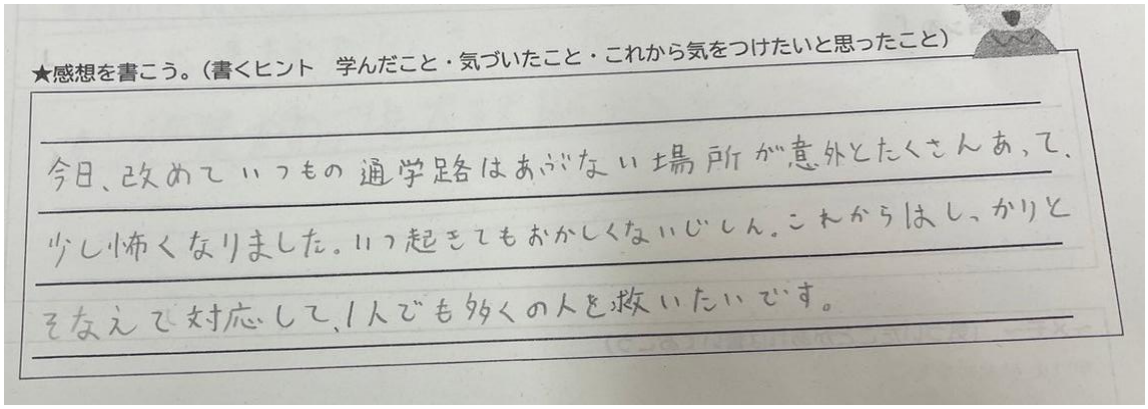
ぼくは、その後、家にもどり、家でくつろぎ、安心しました。なので、これからは、おちついて、ひなんできるようにしたいと思います。

また、このように、定禅寺通りに焦点を当てて道路の状況や建物の状況、地域の人の状況を鮮明に書く児童もいた。そのほかにも、具体的に地震が起きてから避難をするまでの流れを書き、原稿用紙7枚分の小説を書きあげた児童もいた。自分のことだけではなく、周りの様子も想像し、具体的に書くことができている児童が多かった。これは、自分の地域のことを把握できており、ある程度どこにどんな危険があるかわかっているからこそ書くことができたのだと考える。

今回、防災小説に取り組んだことで、自分で危険を想像し、グループワークを通して他の人の小説から新たな危険を知り、中継の活動を通してより具体的に、自分の身の周りの危険に目を向けられていたらいいなと思う。

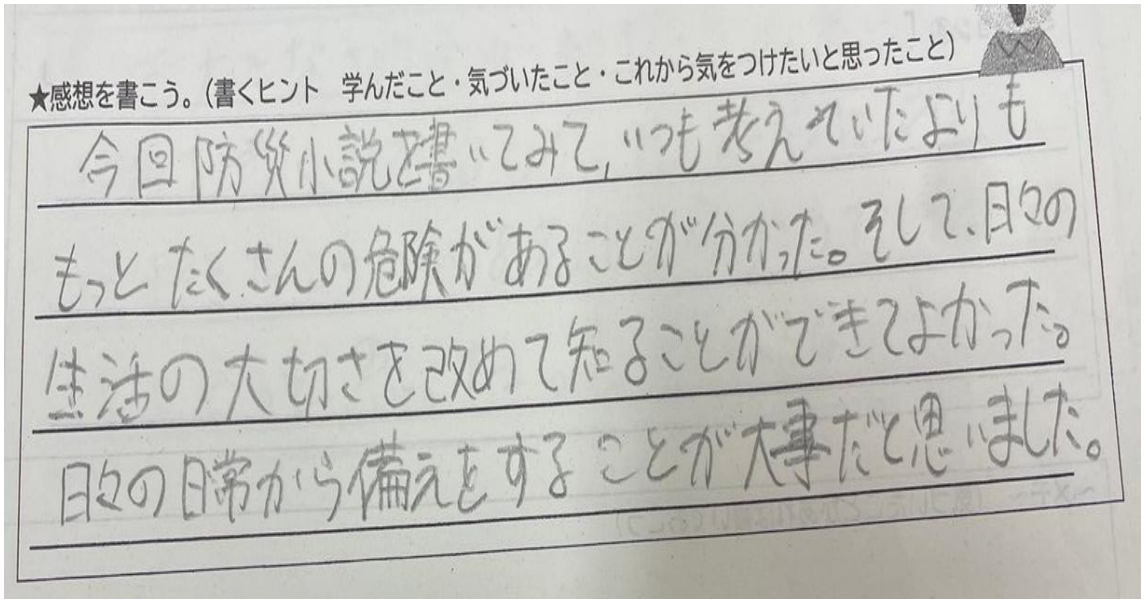
【児童が書いた感想について】

授業の最後、児童に感想を書いてもらった。



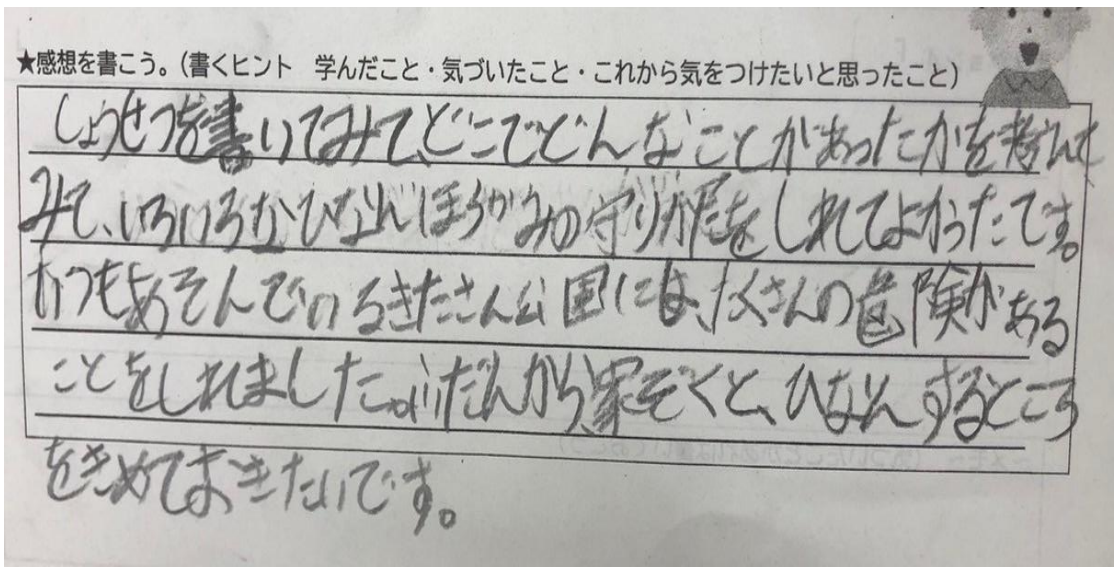
★感想を書こう。（書くヒント　学んだこと・気づいたこと・これから気をつけたいと思ったこと）

今日、改めていつもの通学路はあぶない場所が意外とたくさんあって、少し怖くなりました。いつ起きてもおかしくないじしん。これからはしっかりとそなえて対応して、1人でも多くの人を救いたいです。



★感想を書こう。（書くヒント　学んだこと・気づいたこと・これから気をつけたいと思ったこと）

今回防災小説を書いてみて、いつも考えていたよりももっとたくさんの危険があることが分かった。そして、日々の生活の大切さを改めて知ることができてよかった。日々の日常から備えをすることが大事だと思いました。



★感想を書こう。（書くヒント　学んだこと・気づいたこと・これから気をつけたいと思ったこと）

しょうせつを書いてみて、どこでどんなことがあったかを考えてみて、いろいろなひなんばしょがあるのかりかいをしれてよかったです。かつもあそんでいるきたさん公園にも、たくさんの危険があることをしれました。いだんから家でくと、ひなんすることをきめておきたいです。

このように、児童の感想には、防災小説に取り組んだことで「想像以上に危険な場所があることに気が付いた」「身の守り方を知ることができた」「身の守り方を知っておくことの大切さに気が付いた」「いつも通っている道の安全な道、場所を初めて知ることができた」「避難の仕方がわかった」「災害時には助け合わないといけない」「冷静に判断することが大切」というものが多く見られた。

また、これからの過ごし方を考え、「安全だと思っていた道も、安全とは限らなかった。避難場所を確かめようと思った」「どこで地震が起きても、落ち着いて適切な行動ができるようにしたい」「今回の学びを次の勉強にいかしたい」と抱負を述べる児童も多く見られた。感想から、児童は新たな発見や知っていたことの再確認をすることができたのではないかと考える。

【4時間目の中継について】

実践できそうな小説を選び、児童と学生で実際に外に出て、地震が起こった時の自分の行動について考えた。

中継はGoogle Meetを使用した。学校に残った人と中継に出た人との意思疎通も特に問題なく行うことができた。教室に残っている児童も地震が起きたときのことを想像しながら、さまざまな意見を交わしていた。

【気づいたこと】

・防災小説の存在を知っていた児童が他の児童に書き方のコツをアドバイスしていた。

・「ペットを飼っていたら避難場所まで連れけるのかな」、「避難先でも生活できるような　荷物を持っていくと書いてあるけど、そんなに大きな荷物を準備して持っていくことはで　きるのかな」「公衆電話しか使えない時に、使い方が分からないのはなど児童がワーク　　シートに書いたこと以外にも問いや疑問が挙げられていた。

【良かった・効果的だった点】

・事前にワークシートを用意することで、児童がより具体的に場面を想像して小説を書くことができていた。

・各班に大学生を1人配置することで、全体に指示が通り、進行がスムーズになった。

・実際に中継に行くことで、児童が安全だと思っていた場所に建付けが悪い建造物がある、　学校に避難できない場合の避難経路を確認する等の気付きを得ることができた。

③総括

【課題と提案】

実践を通して3点の課題が挙げられた。

1つ目は、中継に選ばれた児童が行きたくなかった場合の対応である。これは、複数人分の防災小説を選出し、予備の小説を備えておくこと。改めて中継に行くことの意義を分かりやすく伝えることで解決できるのではないかと考えた。

2つ目は、小説をしっかり読み合う時間が少なかったことである。これはロイロノートのようなICT教材を使い一度に複数の児童が防災小説を閲覧できるようにすることで、児童はグループ内だけでなく、多様な防災小説に触れることができると考えた。

3つ目は教室に残る児童で中継に行く児童が外に出ることに注意が向いてしまい、中継を自分事として捉えられていない児童が見られたことだ。一方で、活動中に児童の「大きなビルがあるよ。」という気付きに、学生が「そしたら、道の真ん中を歩く？端を歩いた方が良いかな？」と発問したことで、中継と教室内の子供たちとをつなぐことができ、防災の活動につながった体験が授業中にあった。

このように、児童が考えるきっかけとなる発問を教師側が積極的に行うことで、ただ中継を見るだけではなく、自分自身で主体的に考えながら、自分事として中を捉えることができるのではないかと考えた。

【防災小説の有効性】

防災小説を書く活動を行うことによって、 防災小説を書く活動を行うことによって、児童に災害発生時の状況を具体的にイメージさせることができる。防災小説を書くことで、児童が避難行動の大切さに気付き、学校での避難訓練に意欲的に参加することを期待し、今年度は活動の題材として選択した。

児童に災害発生時の状況を具体的にイメージさせることができる。防災小説を書くことで、児童が避難行動の大切さに気付き、学校での避難訓練に意欲的に参加することを期待し、今年度は活動の題材として選択した。

児童の感想にも書かれていたように、具体的に考えたことで身の回りにある危険性に気づき、身を守る必要性を感じることができていた。これは、避難訓練を自分事として取り組む上で必要な気付きである。避難訓練を行う前に防災小説を書く・読み合う活動を経て、主体的に避難訓練に取り組むことができるのではないかと考えた。

また、今回の活動は災害発生から避難所まで避難をする過程を書いた防災小説であったが、避難所に避難した後の避難生活や避難所運営の状況においても防災小説を書く活動を行うことができ、広い範囲で防災小説を活用できる可能性があることから、防災小説を書く活動は有効ではないかと考えた。

実践前は、小学生にとって防災小説は難しい活動だと考えていた。しかし、ワークシートで小説を書く前に要素を揃えたり、実際の場所を見て小説と比較したりすることで、充実した防災小説を書くことができた。

木町通小学校の小学5年生では200字原稿用紙2・3枚使って防災小説を書く児童が多く、調査前の想定よりも具体的な文章を書く児童が多かった。ここから、小学5年生にとって防災小説は充実した活動を行うことができる適切な教材であったと明らかになった。

小学生にとって今まで学んだ避難行動や避難訓練の経験を、小説を書くことでアウトプットすることができ、より防災知識が定着するのではないかと考える。小学生で防災小説を実施するにあたって、条件の設定やワークシートで要素をどこまで揃えるかが大切となると感じた。この2点を調整することで小学生でも実施可能な活動になると考える。

○来年度に向けて

今年度は実際に、小学生を対象に防災小説の授業を行うことができた。しかし、準備や始動に時間を割いてしまい、1つの活動しか企画することができなかったのが課題である。来年度は「学校避難訓練」についてより活動の幅を広げていくためにも、他の小学校で防災小説授業の第2弾を行うことや、支援学校での避難訓練のプロデュースを行っていきたいと考えている。また、昨年度行った「クロスロードゲーム」を宮城教育大学版でも作成したい。

加えて、伝承施設や被災地に積極的に足を運び、班員それぞれが震災についての知見や今後の学校避難への考えを高められるよう活動していきたい。

○学生の感想

田村楓菜（1年）

木町通小学校での活動の打ち合わせから話し合いを重ねて、当日を迎え、児童の授業に取り組む姿勢を見てこの活動を行ってよかったと思った。ゼミの時間に授業で何をするかについて話し合う中で得られたものも大きく、今まで知らなかった防災との向き合い方を学んだ。ワークシートの作成ではあまり力になれなかったものの、5時間目の司会進行では5年生に合わせた言葉を使用するように心がけ、防災についての考えを児童が落とし込める時間になるよう尽力した。当日は、防災についてもう一度深く考える機会になった一方で、先輩たちの姿を見て教員の姿勢についても学ぶことができた。パワポ・授業案の作成や実際の授業の進行、児童の注目を集めるための呼びかけなどを行っている様子から、数年後に自分がなっていなければならない姿を想像することができた。

ゼミに入ってから1年間で数々の貴重な体験をしたが、これで満足せず、来年はさらに積極的に活動に取り組んでいきたい。

遊佐将伍（1年）

今年度から311ゼミナールに所属し，防災について積極的に行動するという経験をしたが，仙台市立木町通小学校での活動は僕が高校時代から問題提起してきた，避難訓練の形骸化に対する打開策の一つとなったと思う。東日本大震災を経験していない小学5年の児童に対し，児童が能動的に大地震に被災することを自分事として考えさせる今回の活動は，僕にとって震災を経験している世代と経験していない世代の地震に対する価値観の違いを痛感させられる貴重な経験となった。防災小説というものを通じての活動であったが，僕の担当した班では，巨大地震が起きたときに自分や周りがどうなるのか想像できない児童も多く，これまでの，校庭や体育館に避難し避難完了までの時間を発表するだけの避難訓練では到底児童生徒の命を守ることはできないと感じた。木町通小5年の担当教員らとは本番前の打ち合わせで2度ご一緒したが，教員の防災教育に対する並々ならぬ熱意を感じることができた。また，こちらの計画をできるかぎり実現できるよう動いてくれ，感謝してもしきれない。

現職教員とともに防災教育に携わることで，教員は防災教育に何を期待しているのかを感じ取ることもできた。避難訓練や防災教育を通して児童生徒にどのようなことを身に付けてもらいたいかを考えながら，来年度以降も311ゼミナールにて防災に関する活動を行っていきたい。

菊地愛香（2年）

今年度の活動では、防災小説を通して「誰のための避難か」「何のために避難するのか」という考えを深めることができた。木町通小学校の児童は、災害について学習してはいたものの、東日本大震災を経験していない世代だ。しかし、児童は地震を自分事として捉え、危険な場所を想定して被害を最小限にするための行動を考えることができていた。児童が真剣に防災小説に取り組む姿勢を見て、誰かの震災経験に基づく授業よりも防災小説で適切な段階を踏んで具体的な避難方法や対処法を考える活動が地震の経験値に関係なく全員が等しく学べる機会だったと思う。昨年度よりも避難訓練と教育を結び付けた体験型の防災教育を行い、当たり前の生活の中に防災の意識を芽生えさせる難しさを実感すると共に、様々なアクティビティを取り入れて楽しく防災を学ぶ活動を来年度以降も展開し、未来に繋がる避難訓練を実現させていきたい。

先輩方には数え切れないほどお世話になり、感謝してもしきれません。ご卒業される先輩に避難訓練班の活動が今年度よりもグレードアップしていると胸を張って伝えられるようにみんなで頑張ります。

上野愛莉（2年）

今年度の避難訓練班では、実際に小学校で避難訓練について考える授業を行った。311ゼミナールに入って2年目となり、自分の命は自分で守ること、教員として子どもたちの安全を守ることの責任感を痛感した。

今回の活動で、小学校側の防災に対する意識の高さに驚いた。今の小学生は東日本大震災を経験しておらず、いざというときにどう行動するのかあまり実感が湧かない子どもたちも多い。震災の経験を風化させないよう、防災教育を盛んに行う小学校がもっと増えていくことを期待したい。

また、子どもたちが一生懸命活動に取り組んでいる姿も印象的だった。もし今地震が起きたらどうするのか、思わず目を背けたくなる話だが、それでも子どもたちは自分の命を守ろうと、大切な人

を守ろうと必死だった。子どもたちが書いた防災小説から伝わってきた。子どもたちの震災や避難への関心を少しでも強めることができたと実感した。

小原梨紗（2年）

頼りになりすぎる先輩に頼っていた1年生だった私もついに2年になり、避難訓練班を引っ張っていく1人となった。グループに貢献できたとは断言できないが、今年度は実際に小学校に赴いて自分たちで指導案やワークシート、パワポ作成から授業進行まで行うことができた。正直、震災を経験していない小学生にとって防災の授業を自分事として捉えるのは難しいのではないかと思っていた。どうやったら小学生によりリアルに震災と向き合ってもらえるだろうかと考えていた。今回、防災小説を書き、児童本人がどこで何をしている時に地震が起きたかを自分事として考えさせることができ、想像以上のクオリティになったと感じる。

今年度は他にも3月に能登半島視察に行った。それこそ私にとって少し他人事として感じていた部分が一気に自分事となった。児童が家に帰り、家族に「防災小説って知ってる！？」などと得意げに話せるくらい自然で楽しく学べる防災教育の授業を展開できる教員になれるように来年度以降もゼミ活動に精進していきたい。

本間陽菜（3年）

教員になったら「防災教育に力を入れたい」「自分の命を自分で守れる子どもを育てたい」という思いを持って3年間様々な活動を行ってきたが、子どもたちを目の前にして授業を行うというのは初めての経験だった。自分が今まで学んできたことや考えてきたことを伝えることの楽しさを感じた。授業後に、木町通小学校の児童から「授業をしてくれてありがとう」という言葉をもらい、あたたかい気持ちになった。また、防災小説に取り組んだ後の児童の感想に「北三公園で地震が起きても大丈夫な自信がある」という今回、授業で取り扱い、学んだからこそ得られた感想があり、大変嬉しかった。中には「危険な町だということがわかった」「地震って怖いなと思った」という感想もあり、町に潜む危険を伝えるとともに、町の魅力に触れる授業もしっかり行わなければいけないなと改めて感じた。将来は今回の経験を活かしながら防災教育を行っていきたい。

今年度もたくさんの貴重な経験をありがとうございました。311ゼミで学んだこと全てが私の宝物です。

石川あいり（4年）

今年度で4年目の取り組みとなった。今年度は、今までの学びを活かして「避難訓練をプロデュースする」というグループの目標に一番近い活動ができたと感じている。防災小説を用いた4時間分の授業を通して、児童が「なぜ避難するのか」を考えられるようになることを目指した。「学校の授業の中では、実際に想定している避難場所まで行くことは難しい」という固定概念を、ICTを用いて実行できたことが本当にすごいと思う。この活動によって児童はより深い気付きを得ることができていたと考える。

311ゼミに加入したことで、普通の大学生活では得られない防災知識を得ることができたと思います。来年度以降の活動も頑張ってください。

綾部愛美（4年）

今年度の活動では、これまで行ってきた311ゼミの活動の内容を生かしつつ、実際に子供たちに授業を行うことができた。子どもたちが防災にどんな意識を持っているのか目の当たりにして、防災に向き合う真摯な姿勢を嬉しく思った。授業中、ワークシートや防災小説を書く時には、声を掛けていく中で、「確かに！じゃあこうしたら良いのかも。」「あれ実はここも危険だ。」と気付き、自分自身の命を守るために何ができるのかだけではなく周りの人との関わりについて真剣に考える姿が見られた。授業を行っていく上で、先生側がどこに着目しどういう声を掛けるのかも子どもたちの防災準備に関わると感じた。また、アイスブレイクが声を掛けたり話し合いを行ったりするきっかけにもなったので導入の段階も大切にしていきたい。

311ゼミに加入し4年間活動をしていく中で、色々な場所を視察し、話を伺って、これまでの自分の認識の甘さや意識改革を行えた。それらを今回は授業という形で少しでも子どもたちに還元できたなら良かったと思う。

伊藤紬（4年）

今年度はあまりゼミ活動に参加できませんでしたが、木町通小学校で防災小説の授業実践に関わることができ、貴重な経験となりました。特に、児童と共に中継に向かい、小説を再現する様子を間近で見たことで、災害を自分のこととして受け止める大切さを改めて学びました。子どもたち自身の命を守るために、震災について知ったり、防災を学んだりする機会を保障する責任を果たせるよう、私もこれから学び続けていきたいです。3年間お世話になりました。ありがとうございました。

二階堂颯映（4年）

今年度は、外部に出ての活動をすることはかなわなかったが、毎週の311ゼミ活動を通して、自分の防災観について理解を深めることができた。実践の指導案作成では、子供たちにとって自分事として防災について考えることができるよう、適切な足場架けを行うことを意識して作成をした。また、メンバーの話し合いの内容を受けて、協力していただく学校の希望や子供の実態などを、学校の指導案や指導報告に活かすことを通して、仲間たちと話し合いながら情報共有を密に行い、ともに作り上げていくことの大切さを改めて認識することができた。実践後には内容を共有してもらい、達成感を強く感じているメンバーの姿を見ることができ、このプロジェクトに携わることができたありがたさを感じた。

3年間の311ゼミの活動を通して、震災についてどう語ったらよいのか悩んでいた1年目から、自分の目で知り得たことや感じたことなどの財産を積み重ねることができたことは、本当に有意義な経験となった。また、自分のうちに留めるだけではなく、子供たちと語り部の方や、伝承施設などとをつなげる媒体となる必要性も学び、実践に生かしていきたいと考える。仙台市内の小学校や学童での視察、クロスワードワークショップ、大東文化大学視察の同行、伝承シンポジウムの参加などの経験を通じて得たたくさんの学びを、教職でも活かし、一人一人の子供たちの命の大切さについて常に見つめなおす環境をつくっていきたいと考える。

村上真綺（4年）

今年度は授業実践を通して直に防災教育に取り組むことができたという感触であった。しかし、個人的にはなかなかゼミ活動に参加できず後悔している点も多い。メンバーの支えが非常に大きかった。私は卒業しゼミを離れるが、来年度以降ゼミにいてもいなくとも訓練班のメンバーの活躍を願っている。

「登場人物に血を通わせる。」ゼミ活動ではその言葉を胸に4年間やってきた。木町通小学校での実践でも「もし、今日地震が起きたら」という設定で防災小説に取り組むことで児童に災害を「遠い町で起こった悲しいこと」ではなく「今日にでも自分に起きうること」という意識を持たせたかった。児童は私の想像以上に理解し、その意識を持ち活動していた。そのような姿を見ることができ本当によかった。私は311ゼミでたくさんのことを学んだという言葉では片付けられないくらいにたくさんのことを学んだ。武田先生にも大変お世話になった。コロナ渦のみくまの支援学校オンライン講話、大谷小学校と北六番丁小学校の視察、ウルスラ学童の避難訓練、淡路での防災プロジェクト、沖縄、福島大熊町…私の4年間は濃すぎる。今度はその経験を生かし子どもたちへ恩送りをしていきたい。

采澤七海（4年）

今年度は、初めてこちらから発信した活動ができた。防災小説の授業を行う上で、自分たちで書き、その難しさを感じた。子どもたちに対しては、急に書き始めさせるのではなく、ワークシートやスライドを準備し授業に臨んだが、周囲で支えてくれたT2～T6の学生がいたからT1として1日を終えることができたと思う。特に4時間目に設定した中継の場面では教室内の子どもたちが他人事にならないように、中継先とのやり取りに子どもたちを巻き込むことを意識した。私たちが想定していたよりも事細かに、自分事として小説に表現している子どもが多かったため、成果につながったのだと思う。

4年間311ゼミに所属し、被災地の視察や避難訓練の視察、今年度の授業実践など様々な活動に取り組むことができた。自分の目で見たからこそ感じた気持ちを忘れずに教壇に立ちたい。他の学生と協力して進めていく活動も自分にとっていい経験になった。

佐々木侑里（M2年）

昨年度までの学校避難班では、学校等の避難訓練の観察を通して避難について考える活動を行ってきた。今年度は、初めてゼミ生が発信をする活動を行うことができた。これまでの活動を通して学んだことや考えたことを踏まえて、木町通小学校の児童にどのようなことを考えてほしいか、何を

学んでほしいのかをグループ内で出し合い、授業の計画を練ってきた。児童の感想などからも、児童なりに新たな気付きがあり、今後の生活に活かしていこうとする様子を感じ取ることができた。観察から実践へとステップアップできたことは大きな一歩であると感じる。

春からは小学校教員として教壇に立つ。6年前の第1期の顔合わせの時、大きな被災経験をしたことがないと引け目を感じていた私だが、ゼミでの活動や防災・災害について知ろうとする気持ちに被災経験の有無は関係ないと今なら心から言える。これからは、自分で自分の命を守ることができる子供を育てるために教員という立場でどんなことが出来るのか日々考えていきたい。

以　上